

NIKKEI  
TheSTYLE  
Advertising

Image Courtesy Eli Lilly and Company Archives



①高濃度インスリン製剤の製造工程。この他にも複雑な精製プロセスが必要だった。②米国の大物政治家、チャールズ・ヒューズ夫妻と娘のエリザベス・ヒューズ<sup>®</sup>。エリザベスも糖尿病に苦しめられていた。③インスリン発見に貢献したフレデリック・バンティング氏<sup>®</sup>とチャールズ・ベスト氏。



Image Courtesy Eli Lilly and Company Archives



Thomas Fisher Rare Book Library, University of Toronto

# 糖尿病治療の一步 患者と医師の対話

# 100<sup>th</sup>

## インスリン発見100周年

1921年、カナダのバンティングとベストが糖尿病治療に新たな治療法を発見してから今年で100年。しかし未だ糖尿病とともに歩む人々には多くの困難があるという。世界糖尿病デーとして制定されている本日11月14日、糖尿病治療のこれまでの歩みと現代の課題を振り返る。

1世紀前、  
女、エリザベス  
病に罹患しても  
の宣告を受け  
デリンク・バン  
を救うため、自  
く貢献したイン  
療を開始した。  
なる73歳まで  
インスリン治療  
供の母親、そし  
活躍した。  
糖尿病は膵  
産生されるホル  
ンが不足したは  
なくなったりオ  
疾患だ。インス  
栄養をエネルギー  
命を維持する  
担っている。  
インスリンが  
せなければ、栄  
ないまま血液  
体内を巡り、血  
な臓器に障害  
明や四肢の壊  
全などの合併  
な治療法も無  
呼ばれていた。

トロント大  
世界で初の  
製剤化が課

膵臓が生成  
尿病の関係は  
階から徐々に  
たが、具体的  
至らなかった。  
カナダの名門  
研究チームだ。  
代謝学の権威  
ド教授、バンテ  
学を勉強する  
ズ・ベスト氏が  
出に成功した  
をした。後にチ  
化学者ジエーム  
が抽出法に改  
したインスリン  
試験的な投与

清野 裕 氏

公益社団法人 日本糖尿病協会 理事長  
関西電力病院 総長



LINE公式アカウント  
糖尿病@LINEヘルスケア

糖尿病患者さんが簡単に実践できる食事法や運動法など、糖尿病と上手に付き合っていくための情報をLINEで提供しています。■アカウント運用: LINEヘルスケア ■コンテンツ提供: 日本イーライリー/ LINEヘルスケア

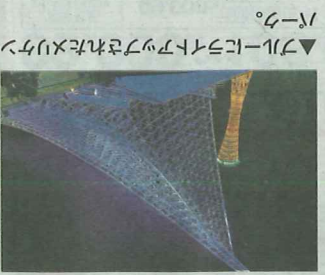
日本イーライリー株式会社



# 世界糖尿病デー

World diabetes day  
14 November

11月14日の世界糖尿病デーは、世界に広がる糖尿病の予防・治療を啓発するため、1991年、国際糖尿病連合（IDF）と世界保健機関（WHO）が制定した。毎年、世界160カ国・地域から10億人以上が参加し、様々なキャンペーンを通じて糖尿病について考える、貴重な機会になっている。その一環として、各地でシンボルカラーであるブルーに建造物がライトアップされる。今年のシンボルライトアップは兵庫県神戸市。ミクネンパークを中心に市内がブルーに染まる。



▲ブルーにライトアップされたミクネンパーク。

糖尿病の原因・病状などは一般には理解しにくい面が多くあります。怖い疾患であるというイメージばかりが先走りして、偏見にさらされるのではなく、心配する患者さんもいます。例えば健康診断で悪い結果が出たら、専門医を受診するより、黙ってやり過ごす人も少なからずあります。職場に知られることに抵抗感を持つってしまうでしょう。日本糖尿病協会は、正しい情報を発信して誤解を解消し、必要な医療を自由に受けることができる社会に変えていくアポボカシー活動を進めています。

## 偏見解消へ情報発信



**寺野 裕** 氏  
公益社団法人日本糖尿病協会の理事、関西電力病院 総務

今年11月の糖尿病の啓蒙のきっかけは、三上昌一博士の講演会である。糖尿病の認知度が高まるにつれて、その影響がさらに大きくなる。糖尿病は、決して治療が難しい病気ではない。適切な知識を持って、正しい情報発信をすれば、社会は変わる。日本糖尿病協会は、正しい情報を発信して誤解を解消し、必要な医療を自由に受けることができる社会に変えていくアポボカシー活動を進めています。

糖尿病は、決して治療が難しい病気ではない。適切な知識を持って、正しい情報発信をすれば、社会は変わる。日本糖尿病協会は、正しい情報を発信して誤解を解消し、必要な医療を自由に受けることができる社会に変えていくアポボカシー活動を進めています。

1921年、カナダのパブリックヘルスが糖尿病治療に新たな治療法を発見してから今年で100年。しかし未だ糖尿病とともに歩む人々は多くの困難があるという。世界糖尿病デーとして制定されている本日11月14日、糖尿病治療のこれまでの歩みと現代の課題を振り返る。



▲インスリン治療を50年以上継続している患者さんへ「リンズ」を授与。



日本イーライリーの取り組み | <https://www.lilly.co.jp/>

日本イーライリーの取り組みは、世界中で多くの人に知られたい。正しい情報を発信し、誤解を解消し、必要な医療を自由に受けることができる社会に変えていくアポボカシー活動を進めています。

日本イーライリーの取り組みは、世界中で多くの人に知られたい。正しい情報を発信し、誤解を解消し、必要な医療を自由に受けることができる社会に変えていくアポボカシー活動を進めています。

日本イーライリーの取り組みは、世界中で多くの人に知られたい。正しい情報を発信し、誤解を解消し、必要な医療を自由に受けることができる社会に変えていくアポボカシー活動を進めています。

## 衰める大切な認識を



**末田 馨** 氏  
国際糖尿病連合（IDF）常務理事、中部大学 教授

慢性疾患である糖尿病は、患者さんと主治医の信頼関係が重要です。日常生活の悩みなどを打ち明けると、良い治療につながります。患者さんが自然に話したくなる雰囲気が必要で、あれもこれもダメ、上から目線の診療では、言いたくも口にならなってしまう。もちろん病状にもよりますが、患者さんの話を聞いて少しでも良い点があったら、褒めることが大切です。がんばろうという力を引き出すきっかけにもなります。